

令和元年5月30日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02447

研究課題名(和文)近代初期英国における食事文学についての歴史的・文化史的研究

研究課題名(英文)The Historical and Cultural Historical Research on the Dietary Literature in Early Modern England

研究代表者

滝川 睦 (TAKIKAWA, Mutsumu)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90179573

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：(1)近代初期英国の食事文学において表象される饗宴が、当時の英国における文化的装置である、雄弁術を構成する記憶術や、宮廷仮面劇と密接な関連性をもっていたことを証明した。(2)近代初期英国の食事文学における「ダイエットの詩学」を解明した。とくにシェイクスピアの四大悲劇における、食欲によって肥大化した主体とテキスト本体を前景化すると同時に、それらを浄化し、消尽していく「ダイエットの詩学」のパラダイムを解明した。(3)シェイクスピアの『アテネのタイモン』において表象された宴が、主体の生成と消尽というルネサンス的テーマと結びついていることを、食事文学の視点から解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果は、本研究が近代初期英国における文学作品に対して、食事文学という斬新な視座から批評的光を照射するだけでなく、文学作品を当時のバジャントや饗宴というコンテキストの中で捉えなおす新しい試みであり、同時に近代初期英国における食事文学と、当時の自己・主体の生成と消尽の関連性を探求する、従来の近代初期英国文学研究とは大いに異なる斬新な研究であることを実証している。本研究成果は近代初期英国の文学研究の新たな地平を切り開いたと言える。

研究成果の概要(英文)：(1)The research demonstrates that the banquets represented in the dietary literature in early modern England are deeply connected with the contemporary cultural devices such as the art of memory and court masques. (2)The research demonstrates that the main stress falls on the fact that the poetics of diet enacted by Shakespeare's major tragedies draws the different trajectory from the contemporary dietetics: from the release of "appetite," through "boundless intemperance," to the purgation. The accelerating "appetites" which start the poetics of diet represented in Shakespeare's major tragedies mainly consist of female characters' desires. (3)The research makes it manifest that, in Shakespeare's Timon of Athens, the cannibalistic images deconstruct the masque-like binary opposition in this play. Moreover, the dietary consumption in this play represents the fashioning of Timon's self as well as its voidness.

研究分野：人文学

キーワード：食事文学 近代初期英国 シェイクスピア 饗宴 ダイエットの詩学 食欲 宮廷仮面劇 文化のリハ
ーサル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究の背景として以下の諸点が挙げられる。

(1) 従来、近代初期英国の文学研究において食事文学 (dietary literature) や食事文化に十分な焦点が合わされてこなかったこと。

(2) 食事や食物の表象に注目した数少ない研究 Joan Fitzpatrick の *Food in Shakespeare* (2007) や David B. Goldstein の *Eating and Ethics in Shakespeare's England* (2013) など

は、Shakespeare 劇に表象された食物のイメージ分析に終始したり、食事とコミュニティー形成との関連を探ることに重点が置かれており、本格的に歴史・文化史的コンテクストに布置して食事文学をとらえてこなかったこと。

(3) 直接、近代初期英国における食事文学とは関わらないまでも、当時の食事文化を解明する大きな手がかりを与えてくれる、Mikhail Bakhtin の *Rabelais and His World* (trans. 1965)、Gail K. Paster の *The Body Embarrassed* (1993) や Felicity Heal の *The Power of Gifts* (2014) の成果が十分に活用されてこなかったこと。

(4) 平成 22-24 年、25-27 年の科学研究費補助金による研究課題 近代初期英国における奉公人文学と寡婦・寡夫文学に関する研究 が、本研究で焦点化する食事文学と関連性をもつこと。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代初期英国における食事文学について歴史的視座および文化史的視座から解明することである。とくに 16 世紀から 17 世紀における食事文学というジャンルを焦点化することによって、そのジャンルの特異性を明らかにし、当時の食事文学の諸相を、歴史的・文化史的視座から分析した食事文学に焦点を合わせることで、近代初期英国文学のキャンノン (canon) の見直しを行うと同時に、そうした食事文学の隆盛と、ロンドンをはじめとする当時の英国都市や周辺地域を結ぶ農産物の生産と消費、交易、家政学、健康学さらには当時の食物をめぐるエコシステムとの関連性を解明することが本研究のねらいである。

3. 研究の方法

「研究の目的」に掲げた、本研究で焦点を合わせるべき問題点を次のような計画に従って解明した。

(1) 近代初期英国の食事文学を分析し、そのジャンルを同定し、作品内に表象される食事・食物そして宴の諸相を軸に、食事文学の特徴をデータベース化した。ここで分析の対象となった作品はシェイクスピア (Shakespeare) の『夏の夜の夢』 (*A Midsummer Night's Dream*, 1595)、『ハムレット』 (*Hamlet*, 1600-01)、『マクベス』 (*Macbeth*, 1606)、『アテネのタイモン』 (*Timon of Athens*, 1605)、『テンペスト』 (*The Tempest*, 1611)、エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) 叙事詩『妖精の女王』 (*The Faerie Queene*, 1590, 96) などである。

(2) 近代初期英国の文学・歴史・文化史研究において、食事、食物、そして饗宴のモチーフに着目した研究の総括と、本研究の批評視座の構築。

(3) 近代初期英国における食事文化の諸相を、当時のドメスティシティ (domesticity) の概念に着目しながら、(1) でデータベース化した食事文学との関連性に焦点を合わせて歴史的に解明した。

(4) 近代初期英国における生理学、食餌学、健康学、栄養学などの知的領域における一次資料と食事文学・食事文化との関連性を歴史的・文化史的視座から解明した。

(5) 近代初期英国における饗宴というパジャント (pageant) と食事文学との関連性について、古代ギリシア・ローマの食卓文学の伝統を視野に収めつつ解明した。とくに本研究では、近代初期英国演劇においてスペクタクルとして演出された饗宴に焦点を合わせながら、上記の関連性について分析を行った。

(6) 近代初期英国における食事文学と、当時の歓待 (hospitality) や贈与 (gift) の概念との関連性について解明した。

(7) 古代ギリシア・ローマ時代から近代初期にいたる汎ヨーロッパ的な食事文学のコンテクストの中で、近代初期英国の食事文学作品を分析した。

(8) 現代のエコクリティシズムの視座から、近代初期英国の食事文学と当時のエコシステムの関連性について研究した。

(9) 上記の (1) から (8) の研究を英国図書館、ロンドン大学附属図書館、東京大学図書館等に収められている文献資料を活用して行い、研究総括を行った。

4. 研究成果

本研究によって得られた成果は以下のとおりである。

(1) 近代初期英国の食事文学の具体的作品として『ハムレット』と『テンペスト』を分析の対象とし、両作品に表象された「宴」(banquet, feast, revels, pageants)の変容について、前者に関しては近代初期の記憶術との関連性に、後者については宮廷仮面劇(court masques)との関連性に焦点を合わせて分析した。

『ハムレット』は一幕二場の宴に始まり、五幕二場の宴で幕を下ろす、近代初期英国における食事文学の最たる例であるが、作品中で描かれる饗宴は、そこで供される食事が登場人物の食欲を掻き立てるような宴ではない。一幕二場の現王が主宰する宴は「忘却術」を披露する場であり、五幕一場における、ヨリック(Yorick)の髑髏を手にして行われるハムレットの瞑想の現場は、近代初期英国の記憶術の源泉ともいえる、古代ギリシアの饗宴を強く連想させる。五幕一場の墓場はすなわち、古代ギリシアの詩人シモニデス(Simonides)が記憶術を生成した、倒壊した饗宴ともいえるのである。一幕五場でハムレットが亡霊の言葉を記憶しておこうと取り出すタブレット(tablet)もまた、記憶術を生み出した宴のヴァージョンである。

『テンペスト』における宴も、近代初期英国の記憶術と忘却術の実践の場である。記憶と忘却がともに実践される場という意味では、本劇の宴は、スティーヴン・マレイニー(Steven Mullaney)が指摘する「文化のリハーサル」(the rehearsal of cultures)そのものである。スペクタクルの対象を最大限に披露しながら、同時に蕩尽していく仕掛けが「文化のリハーサル」であるからだ。さらに、本劇の饗宴には当時の宮廷仮面劇の色彩が極めて強いことから、劇中において表象される宴は、登場人物の自己・主体を消尽させる場といえる。当時の宮廷仮面劇とは、公の場から切り離されたプライベート生成の場であると同時に、そのプライベートな場で消費される果物やデザートと同じく、自己・主体を徹底的に消尽していく場面でもあるからだ。

(2) 近代初期英国における「ダイエットの詩学」を、シェイクスピアの典型的な食事文学である四大悲劇から析出した。近代初期英国における「ダイエット」(diet)とはOEDが定義する「とくに医療や刑罰の目的で、種類が制限され、分量が定められた所定の食事。養生規則」の謂いであり、当時の「ダイエット学/栄養学」(dietetics)の要諦は「身体的衝動をコントロールし、その衝動を社会的検閲に従わせること」(Jeanneret 73)であった。シェイクスピアの四大悲劇は、食欲という欲望を一気に掻き立てておき、同時に近代初期における「ダイエット学/栄養学」の要諦に、登場人物および劇の構造そのものを従わせるというパラダイムに基づき制作されている。欲望を掻き立てると同時にそれを抑制するというシェイクスピア特有の「ダイエットの詩学」が展開されるのは『夏の夜の夢』において妖精の女王タイテーニア(Titania)が口バ人間のボトム(Bottom)に食餌療法を受ける場面である。

『マクベス』においては劇冒頭の魔女の予言にあるように、マクベスの王位への欲望が食欲としてとらえられ、その欲望を加速化・肥大化させていくマクベスの没落が「ダイエットの詩学」に基づいて描かれる。また劇の構造そのものもその詩学のパラダイムに則している。

『オセロ』(Othello, 1603-04)の冒頭では、食欲を募らせるようにしてオセロー(Othello)の話を貪り摂取するデズデモーナ(Desdemona)に焦点が合わせられる。デズデモーナの欲望は劇中で「食人種」の貪婪な食欲とスーパーインポーズされている。デズデモーナの欲望はエミリア(Emilia)によって増幅され、オセロに転移するだけでなく、さらにキプロス島での無礼講へと連鎖していく。イアーゴ(Iago)の中傷はこれらの食欲と等価と見做される欲望を標的とするのである。

『リア王』(King Lear, 1605-06)の冒頭に置かれるのも女性の食欲である。寡黙を貫くコーディリア(Cordelia)が野蛮なスキタイ人や食欲旺盛な食人種に譬えられているからである。しかし、本劇において「ダイエットの詩学」が実践されるのはコーディリアにおいてではない。ゴネリル(Goneril)、リーガン(Regan)、そしてリア王こそが、過剰なる言葉への偏愛から沈黙という境位にいたる「ダイエット」を経験し、「ダイエットの詩学」を実践しているのである。

『ハムレット』もまた、食欲に譬えられる欲望をもつ女性が、その欲望を加速度的に募らせていくところから開始される。ハムレットによって母ガートルード(Gertrude)は「母さんは父さんにすがりついていたものだ、/まるで食べたものによって/ますます食欲が募るように」(1.2.143-45)と表現されているからである。母親の欲望は息子へと、さらにはデンマークの政体にも転移する。本劇においては、欲望を募らせることで肥大化した身体、記憶を失って愚鈍になり、肥え太った身体、そして「雑草が茂り放題の庭」(1.2.135)と化した政体を浄化し、スリムな「体」にするために、五幕二場の「誇り高い死」(5.2.48)が催す「饗宴」が用意されているのである。

近代初期英国における食事文学の集大成ともいえるべき、シェイクスピアの四大悲劇のパラダイムは、食欲によって表象される、ありとあらゆる欲望が凝集し、結晶化した「太った」身体・登場人物の身体であれ、国家・共同体の「身体」であれ、を極端にスリムにしていく、近代初期英国特有の「ダイエットの詩学」なのである。

(3) 近代初期英国における食事文学の代表的作品ということが出来る、シェイクスピアの『ア

テネのタイモン』の分析を行った。本劇においては、近代初期ヨーロッパの典型的バンケット（饗宴）から、その陰画ともいべき白湯の宴に至るまで、種類の饗宴が表象されていること、そして宴がカニバリズム（食人）のイメージを伴って表象されていることが最大の特徴である。本劇におけるカニバリズムのイメージは、食事文化の粋をつくした宴が演出される宮廷（都市）と、その対極にあり、劇後半においてタイモン（Timon）が野人のごとく隠棲する森との二項対立を脱構築する契機を孕んでいる。また贅をつくした饗宴と、「無」を主題にした白湯の饗宴が並行的に描かれているのは、それらの宴が近代初期英国のジェームズ一世（James I）のホワイト・ホールにおけるバンケット・ハウスにおいて演じられた宮廷仮面劇と、それらの饗宴が等価であることを示している。なぜならば当時の宮廷仮面劇は、きわめてプライベートな空間において食されるデザートと同じ価値を有しており、プライベートな空間において生成される宮廷人の自己・主体を最大限に膨張させると同時に、その生成した自己・主体を徹底的に消尽させていく文化的装置「文化のリハーサル」に他ならないからである。本劇においてタイモンは饗宴によって彼の自己・主体を最大に膨張させると同時に、饗宴を主宰し参加することでそれらを極小「無」へと変貌させていくのである。

上記の成果は、本研究が近代初期英国における文学作品に対して、食事文学という斬新な視座から批評的光を照射するだけでなく、文学作品を当時のパジャント（pageants）や饗宴というコンテキストの中で捉える試みであり、同時に食事文学と、自己・主体の生成と消尽の関連性を探るまったく新しい試みであることを立証している。本研究は近代初期英国文学研究の新たな地平を切り開いたといっても過言ではない。

<引用文献>

Fumerton, Patricia. *Cultural Aesthetics: Renaissance Literature and the Practice of Social Ornament*. U of Chicago Press, 1991.

Jeanneret, Michel. *A Feast of Words: Banquets and Table Talk in the Renaissance*. Translated by Jeremy Whiteley and Emma Hughes, Polity Press, 1991.

Mullaney, Steven. *The Place of the Stage: License, Play, and Power in Renaissance England*. U of Chicago P, 1988.

Shakespeare, William. *Hamlet*. Edited by Ann Thompson and Neil Taylor, rev. ed., Bloomsbury Publishing, 2016. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.

Shakespeare, William. *King Lear*. Edited by R. A. Foakes, Nelson, 1997. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.

Shakespeare, William. *Macbeth*. Edited by Sandra Clark and Pamela Mason, Bloomsbury Publishing, 2015. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.

Shakespeare, William. *A Midsummer Night's Dream*. Edited by Sukanta Chaudhuri, Bloomsbury Publishing, 2017. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.

Shakespeare, William. *Othello*. Edited by E. A. J. Honigmann. Introduction by Ayanna Thompson, rev. ed., Bloomsbury Publishing, 2016. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.

Shakespeare, William, and Thomas Middleton. *Timon of Athens*. Edited by Anthony B. Dawson and Gretchen E. Minton, Cengage Learning, 2008. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

滝川 睦、『アテネのタイモン』再考 近代初期英国における食事文学の視座から、『名古屋大学人文学研究論集』、査読無、第2号、2019、pp. 89-99

滝川 睦、ダイエットの詩学 シェイクスピアの四大悲劇における、『名古屋大学人文学研究論集』、査読無、第1号、2018、pp. 55-71.

滝川 睦、シェイクスピア劇における宴の変容 『ハムレット』と『テンペスト』、『名古屋大学文学部研究論集』、査読有、2017、pp. 15-29.

[学会発表](計1件)

滝川 睦、ダイエットの詩学 近代初期英国における、『シンポジウム「食卓のイギリス エリザベス朝からロマン主義時代まで」』、日本英文学会中部支部第69回大会、2017

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。